

4 黒毛和種の屠殺適期

1 背景と特徴

黒毛和種の若令肥育が長期化し、大型体重、高月令で出荷している傾向であるが、それに比し、枝肉規格のアップが、あまりみられず、また、枝肉市場で、厚脂、大貫物と嫌われることが、でてきている。そこで、増体、飼料要求率の推移と、屠殺体重、月令と肉質との関連性から、屠殺適期を検討し、また、沢山の系統があるが、それぞれ、産肉性が異なるので、その系統の双壁を成している但馬系（茂金、奥城系）と鳥取系（東豊系）の屠殺適期を併せて検討した。

2 技術の内容

1) 黒毛和種全般

(1) 〔増体及び飼料の効率〕より、と殺適期は、体重550kgから600kgが目処であろう。

(2) 〔屠殺体重、屠殺月令と肉質〕とは、正の相関がみられるが、と殺体重別と肉質、と殺月令別と肉質との推移は、各ステージのバラツキが大きく、また、スムーズに移行していないことより、と殺体重500kg以上、と殺月令2ヶ月以上であれば、これ以上の肉質向上の期待は少ない。（「上」～「極上」が可能）

体重、日令と肉質の相関

	日 令	交 雑	脂肪含有率	ロース芯断面積	D.G.
体 重	0.642***	0.294*	0.258*	0.678***	0.552***
日 令		0.283*	0.424**	0.351**	0.133 ^a *
脂肪交雑			0.669***	0.119 ^a *	-0.067 ^a *

と殺体重別の枝肉状況

体 重	頭 数	枝肉歩留	脂肪交雑	脂肪含有率	枝肉規格	数字の内訳
500kg	15頭	62.9% (2.09)	2.37 (35.5)	12.80% (21.0)	1.13 (73.6)	「特選」 } 0 「極上」 }
550	27	63.6 (2.0)	1.94 (37.8)	12.02 (27.3)	1.33 (50.8)	「上」 1
600	10	63.0 (2.83)	2.77 (31.6)	13.31 (24.6)	0.80 (98.6)	「中」 2
650	8	63.3 (1.8)	2.91 (28.4)	13.60 (29.6)	0.88 (73.2)	「並」 3
700	9	64.1 (2.3)	2.77 (25.1)	14.30 (16.6)	0.89 (67.6)	

()内は変動係数

と殺月令別の枝肉状況

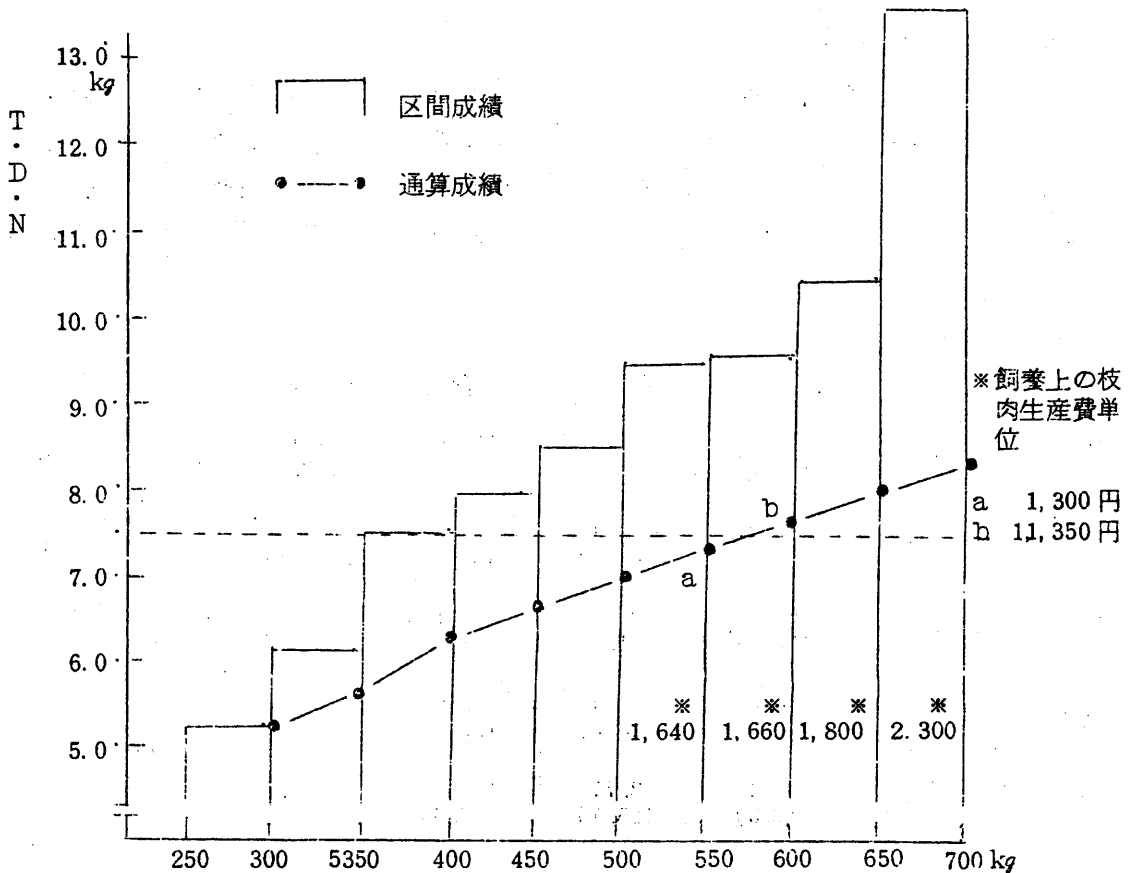
月令	頭数	枝肉歩留	脂肪交雑	脂肪含有率	枝肉規格	枝肉規格の現況	実数52年 ()51年
2 2ヶ月	1 4頭	63.1% (2.0)	2.42 (35.9)	11.81% (31.1)	0.79 (113.6)	割合(%)	枝肉重(kg)
2 4	2 5	63.7 (2.2)	2.14 (39.5)	12.44 (24.7)	1.36 (55.7)	特 極	4.1(5.4) 382(374)
2 6	2 0	62.9 (2.0)	2.22 (35.1)	12.64 (21.3)	1.20 (58.0)	上 中	7.8(10.3) 380(367)
3 0	1 2	63.9 (3.5)	3.09 (18.2)	16.11 (15.7)	0.67 (73.9)	並 外	32.9(36.6) 374(358)
							8.5(7.9) 333(311)
							0.2(0.3) 233(?)

(3) (枝肉市場)での要望枝肉重量から生体重を勘案すると、550 kgから600 kgである。

枝肉構成割合(%)

体 重	骨	赤 肉	脂 肪
550 kg	13.2	48.5	38.3
600	11.9	44.9	43.3

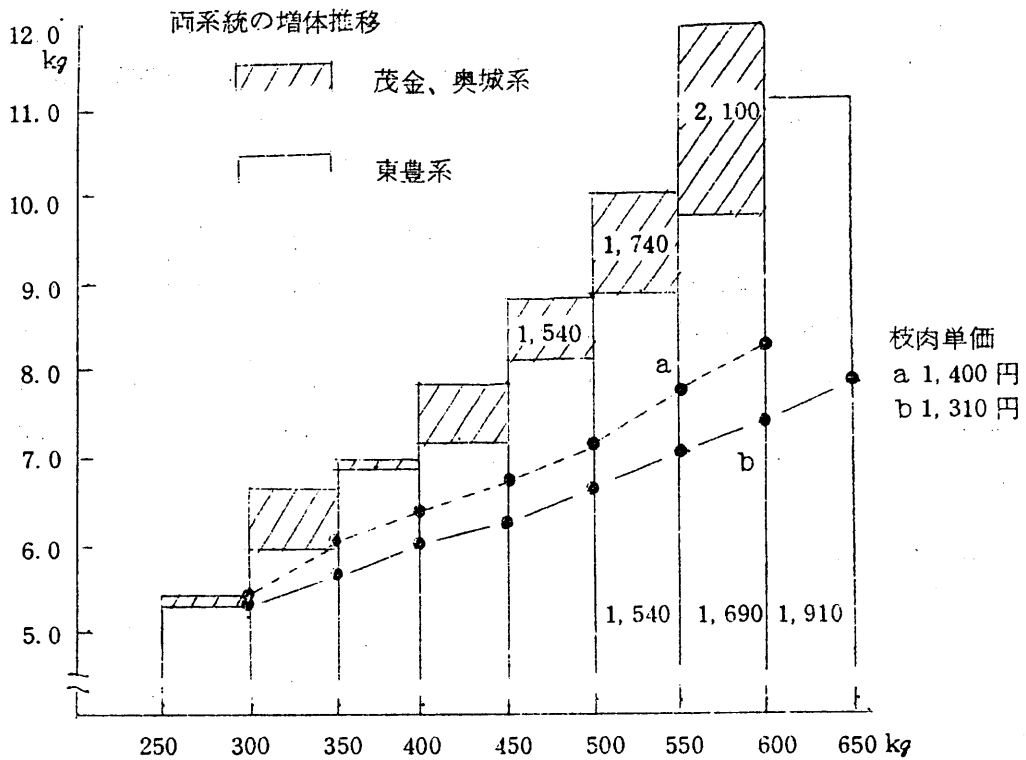
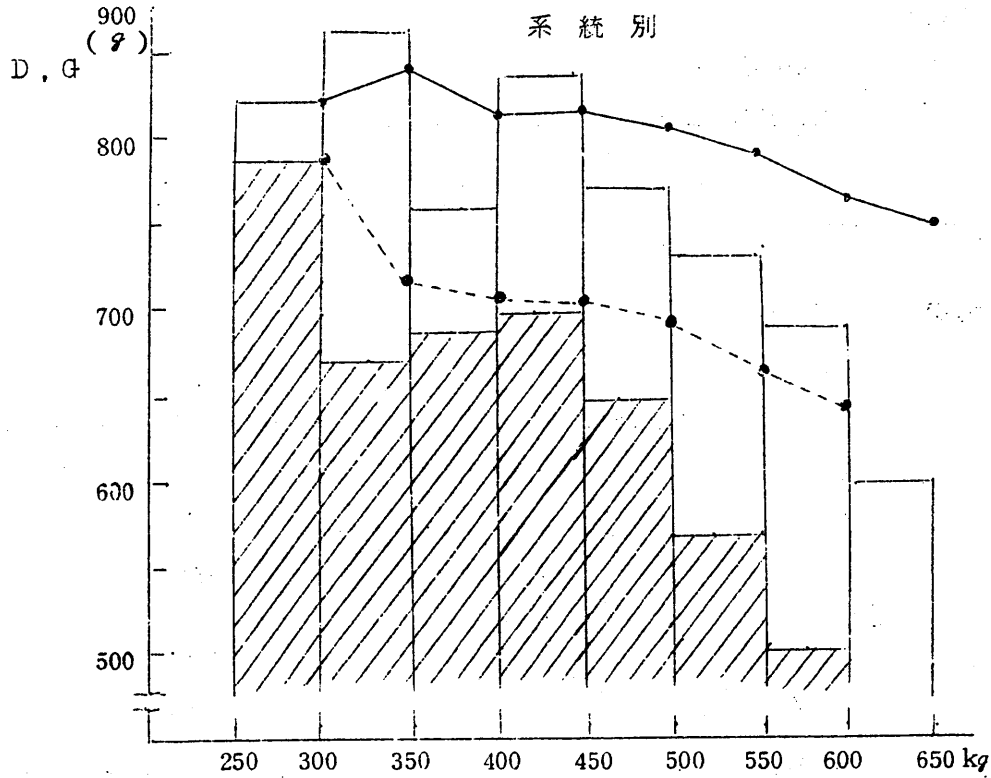
(4) (経済的)に、肥育期間中の経営費(素牛費除き)の推移は、体重600 kg以降のコスト(図2 枝肉当)は急騰するが、体重600 kgまでの通算コスト、それ以前の区間のコストから、と殺適期は、体重550 kgから600 kgが目安であろう。(月令は2 4ヶ月以内を目処)



飼料要求率(1 kg増体当り T.D.N 量)

2) 系統別

- (1) 〔東豊系〕は、増体能力が優れていることより、体重600kg、月令22~23ヶ月令(通算D.G.0.8kg)を屠殺適期の目安とする。
- (2) 〔但馬系〕は、体成熟が早く、肉質が期待できることより、体重550~570kg、月令24ヵ月(通算D.G.0.7kg)を目安とする。



3 指導上の留意点

- 1) 「特選」肉志向の農家には不適。
- 2) 他にも系統があるが、上記両系統の間に位置している。(不明瞭の場合は「全般」参考)

4 関連課題名

昭和50～52(岩手畜試)

肉用牛の岩手型肥育技術確立試験 (1)仕上体重の大型化

5 参考資料

試験成績概要報告書 52年度 岩手畜試

5 高原造林地の収養力

1 背景と特徴

昨近、山間開発計画が進められ、混牧林における林畜複合利用が重視されてきているが、3～7年生アカマツ、カラマツ造林地に対する放牧利用については下刈省力とのかねあいで、その実用性が実証され、49年度に普及奨励に供している。

その後、さらに3カ年の造林地放牧における収養力の推移について検討したところ、比較的高い生産力が維持されている結果を得た。

2 技術の内容

1) 収養力の推移

放牧牛の増体・野草生産量・造林木被差の程度からみて、入牧C・Dはおよそ28～48 CD/haであった。

林床の野草生産量はアカマツ7～10年、カラマツ7～12年生林で急激な減少はみられず、およそ600～1,000kg/haと比較的高い生産量が得られた。

収 養 力

年 度	入 牧 C・D/ha							
	2-a	2-b	2-c	平均	3-a	3-b	3-c	平均
50	52.0	51.3	42.5	48.4	27.6	40.1	50.2	37.2
51	50.5	45.8	41.3	45.6	27.1	39.5	34.7	33.1
52	37.6	38.1	41.5	39.2	21.7	31.3	34.3	27.9
平均	46.7	45.1	41.8	44.4	25.5	37.0	39.7	32.7

林令・樹種別生草収量および利用量 (kg/10a)

	ア カ マ ツ				カ ラ マ ツ					
	7年生林	8	9	10	7	8	9	10	11	12
収 量	556	708	857	687	995	722	664	515	705	667
利 用 量	115	259	345	231	279	304	296	192	123	359
利用率(%)	20	35	40	34	28	43	45	38	17	54